

東北紀行

Tohoku Travelogue

第 50 号 / 2023 年 8 月 / 編集：稲葉雅子 (株)たびむすび

災害復興ツーリズムのジレンマ試論

石巻専修大学 丸岡泰

「復興」からの視点

「復興のツーリズム研究分科会」は「復興」をテーマとしている。その視点から、東日本大震災後発表された先行研究について筆者の見方を示しておきたい。

まず、災害後のボランティア・ツーリズムの現象については、本研究会ではこれを復興のための活動であり、広義の復興ツーリズムの一部と考える。これに関する研究も同じく復興の研究の一部と考える。

次に、東 [2013]については、2 点の疑問がある。1 点は提案された集客施設の象徴ツナミの塔（瓦礫製の太陽の塔）のように被災の遺物をアートの一部とすることが、被災者感情から許容されるかということである。もう 1 点は、この集客施設の事業としての採算性である。

次に、東の研究とも関連する「ダークツーリズム」（井出[2018]他）について研究上の課題と考えられることは、概念に嫌悪感を示す旅行者・研究者がいること、「ダーク」の規定にあいまいさが残ると感じる例があること、経済性・事業としての採算性が不明であることである。

災害後の復興を前面に出した研究としては、総合観光学会[2013]、室崎・橋本[2021]があり、本研究分科会は観光を被災地の復興の推進力ととらえるという点でこれらの先行研究と視点を共有する。

その反面、本分科会が独自の視点として提起するのは、大災害後の被災地を目的地とする観光には、「災害復興ツーリズムのジレンマ」と呼ぶべき現象がある、という可能性である。それは、大災害後行われる災害をテーマとするツーリズムの振興が、他の一般ツーリズムの抑制につながるという可能性である。室崎・橋本の表現にならえば、観光の機能に「復興のエンジン」とともに、速度を抑え低速を維持する「復興のエンジン・ブレーキ」のような作用の存在の可能性の指摘とも言える。

「災害復興ツーリズムのジレンマ」試論

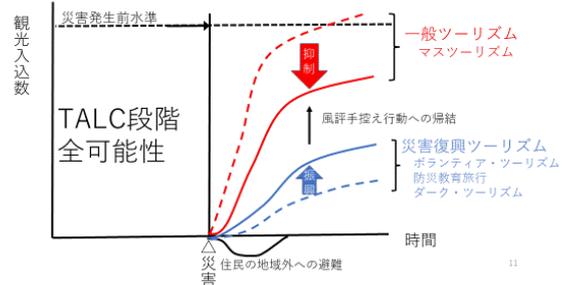
時間とともに観光客数の推移をとらえる先行研究としては、著名なバトラー (Butler[1980]) の観光地ラ

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohoku イフサイクル (TALC) 論があり、本分科会でもこれを基礎としてその応用的な試論の構築を行う。

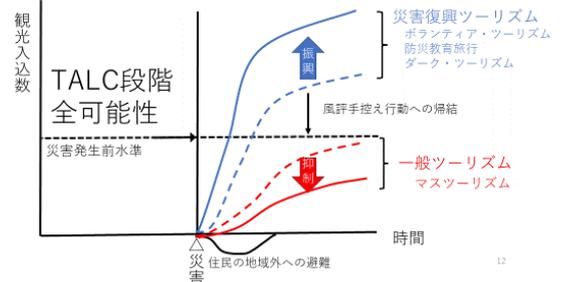
まず、本研究部会が取り扱う大災害は TALC とは無関係にあらゆるタイミングで発生すると考えるべきである。そのため、本研究分科会では、災害前のライフサイクルが大災害により一時的に白紙化されるところからのツーリズム復興パターンについて検討する。

災害の規模やその影響が及ぶ時間の長さは多様だが、出発点として、次の 2 枚の図に示す 2 パターンを想定することができる。上の図は大観光地であり、災害前の観光入込数の水準が災害後の復興機関での入込数水準よりも大きい場合、下の図は小観光地であり、災害前の入込数水準が災害後の復興機関の入込客数の水準よりも小さい場合である。

災害復興ツーリズムのジレンマ試論 (丸岡作) 一般ツーリズム>災害復興ツーリズム の場合



災害復興ツーリズムのジレンマ試論 (丸岡作) 災害復興ツーリズム>一般ツーリズム の場合



災害後の観光を災害復興をテーマとするものとそれ以外の一般ツーリズムに二分して考える。前者にはボランティア・ツーリズムやダークツーリズム、支援者の移動、および防災研修やその目的の教育旅行などが含まれる。一般ツーリズムには、いわゆる「楽しみのための旅行」が含まれる。また、どちらの場合においても大災害により住民の流出が起きることを想定しており、その流出規模が横軸よりも下に描かれている。

2 枚の図において、それぞれ破線と実線で示す災害復興ツーリズムと一般ツーリズムにおいて、破線はプロモーション活動がない場合の入込客数の推移、実線はある場合の入込客数を指す。災害復興ツーリズムのジレンマとは、2 枚の図中の太い色付きの逆方向の上下の矢印が示す通り、災害復興ツーリズムの「振興」が行われた場合に一般ツーリズムに「抑制」が働く可能性を指している。「抑制」を想定する根拠は、一般ツーリズムの潜在的参加者が災害を想起することにより風評手控えの行動を起こす可能性があると考えられるためである。実際には観光が可能であっても「今は

この地に観光に行ける環境ではない」ゆえの手控えにつながる可能性である。本研究分科会では、ジレンマとは、以上の計数的見方に加え、災害復興と一般のツーリズムの質的相反をも含むと考えたい。

本研究分科会は、このジレンマの存否を検討しつつ進める方針である。また、今後の研究課題として、様々な観光地の事例を扱うために、観光地経営の発展段階のプラットフォームの構築も試みる予定である。

関東大震災後の横浜のツーリズム

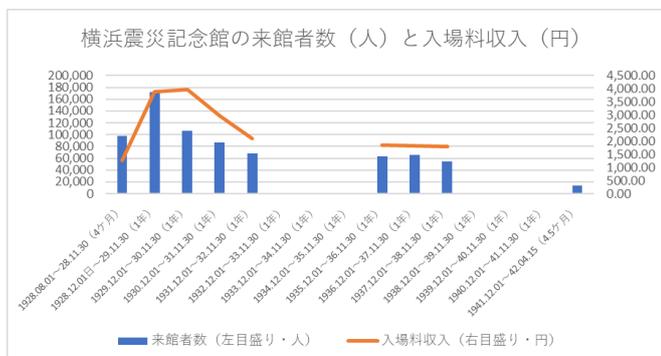
今年に関東大震災からちょうど100年目のため、事例研究の対象として同震災で被害甚大だった横浜を取り上げ、災害後のツーリズムの側面を紹介する。

1923年9月1日の関東大震災で主な被災地の一つとなった横浜市では、その後、「震災記念館」建設の動きが見られた。その当初の目的は震災の記念物を収集することにあつたと言える。

これを発案し、実現のために動いたのは教育課長の中川直亮だった。設置場所を変えつつ、バラックづくりの初代及び2代の震災記念館を経て、1928年8月1日に3代目の震災記念館が開館した。

開館後、1929年4月23日に天皇陛下による訪問・天覧の記録があることから、この記念館には十分な訪問価値が認められていたと考えられる。また、一般の観光者向けにも、岡田・吉崎・武田[2020]pp.90-94にある通り、1935年の市遊覧バスの4時間コースに同記念館が入っていた。

横浜郷土研究会[1995]p.122（『横浜震災記念館概要』p.四）に記された同館建設費143,670円と同書の付録三「震災記念館関係年表」pp.147-156に記された入場者数と入場料収入の推移（8年と10.5か月分）から同館開館の16年3か月間の入場料収入を合計し不明部分を予想すると、設立資金はこれを大きく上回っていたと推測できる。つまり、同館は付加価値生産拠点ではなく税金の使途だった。よって、室崎・橋本[2021]の表現に従えば、「経済的エンジン」ではなく、「精神的」もしくは「教育的」なそれだったと考えられる。



その後、関東大震災の瓦礫を埋め立てて造られた山下公園を会場に1935年3~5月に開催された市主催の復興記念横濱大博覧会（桑田[2017]に詳述）が剰余金約8万円を生み出したことが、震災記念館リニューアルのきっかけとなった。

市長交代も複数回ありこの剰余金の使途は変更が重ねられる中で、震災記念館は震災遺物・資料保存の性格が弱められ、一般的博物館に近い方向への修正が図られた。館の目的自体、開港歴史館、工業振興や愛市中心の高揚等が検討され、震災の遺物保存と教育といった震災記念館の当初の目的は優先度が下げられた。

災害復興ツーリズムの「ジレンマ」の枠組みに照らすと、災害遺物等の展示を主目的とした当初の震災記念館が、それを前面から外した一般的博物館へのこの時期の方針転換は、災害復興ツーリズムと一般ツーリズムの相反の表れと考えられる。

戦時中の金属回収令に従い、震災記念館の金属類も戦争遂行のために供出された。この供出量は鉄8,790kg、銅579kgと大量であり、このことで多くの震災遺物が戦争協力のために失われた。

1942年に改装工事が行われ、震災記念館は「横濱市市民博物館」として再出発した。同館には震災記念館展示品の継承部分も含まれており、戦時中ながら1日当たりの来館者数は前身の記念館時代と同程度を維持していた。しかし、終戦時の米軍接收期を経て資料管理は行われなくなった（百瀬[2008]）。

このような震災記念館の消失の経緯を見ると、当初の震災の遺物保存や教育といった目的が他の目的を備えた活動・新施設の計画との間で優先度引き下げへの力を受けてきたことがうかがえる。それは、上記のジレンマに属する災害復興ツーリズムと一般ツーリズムとの施設設計時の相反現象と考えられる。

【参考文献】

東浩紀[2013]『福島第一原発観光地化計画』思想地図β 4-2
 Butler, R. W. [1980] “The concept of a tourist area cycle of evolution: implications for management of resources,” *Canadian Geographer*, 24, 5-12
 桑田政美[2017]『博覧会と観光 復興と地域創成のための観光戦略』日本評論社
 井出明[2018]『ダークツーリズム 悲しみの記憶を巡る旅』幻冬舎
 百瀬敏夫[2008]「開館後の横浜市市民博物館」『市史通信』第5号
 室崎益輝[監修・著]・橋本俊哉[編著][2021]『「復興のエンジン」としての観光』創成社
 岡田直、吉崎雅規、武田周一郎[2020]『地図で楽しむ横浜の近代』風媒社
 総合観光学会[2013]『復興ツーリズム 観光学からのメッセージ』同文館出版
 横浜郷土研究会[1995]『横浜に震災記念館があつた』（横浜市震災記念館『横浜市震災記念館記念帖』；横浜市震災記念館[1935]『横浜市震災記念館概要』；『震災記念館陳列品説明書』；中川直亮『付録一 震災記念館創始の由来』；中島信一『付録二 中川直亮のこと』；『付録三 震災記念館関係年表』収録)
 *2023年7月22日の日本観光研究学会東北支部研究会兼同学会「復興のツーリズム」研究分科会オンライン講演の要約。